

2016年 10月 28日

公益財団法人 日本国際協力財団
理事長 神内良一 殿

団体名 特定非営利 NPO 法人幼い難民を考える会
代表者役職名 代表理事
代表者氏名 広戸 直江

2016年度国際協力NPO助成 成長型事業第二四半期報告書

貴財団の2016年度国際協力NPO助成成長型による助成を受けた「藍染め技術の確立と地域の自立を支える持続的収入向上事業」の実施状況について、下記のとおり第2四半期における事業進捗状況を報告いたします。

記

1. プロジェクト名：藍染め技術の確立と地域の自立を支える持続的収入向上事業
2. プロジェクト期間：2016年4月～2017年3月（本報告書 2016年7月～9月実施分）
3. 実施地域：コンポンチャム州コーンミア郡コーンミア地区アンコールバーン村
タケオ州バティ郡トロピエンクラサン地区トロピエンクラサン村
4. 援助対象者及び対象者数：
直接裨益者 アンコールバーン村藍染めグループ7名、販売促進ボランティア2名
間接裨益者 コーンミア郡アンコールバーン村の住民約50名
5. 上位目標：
 - ・藍染め技術の向上により、カンボジア伝統織物の市場価値・文化価値を向上させ、泥藍販売とスカーフの販売による村人の収入が、年間800ドルになる。
 - ・藍染めグループの村人が、泥藍や藍染めスカーフの販売によって収入が増加することで、他の村人も藍染めの事業に関心を持ち、藍染め技術復興と保全の担い手が増え、伝統技術が将来まで残される。
6. 事業進捗状況：

第2四半期（7月～9月）にかけては、村人が中心となつての泥藍作り、また当会が開催する織物技術研修、専門家を招へいしての染料維持研修を実施した。また、当会カンボジア事務所（CYK）では、村のボランティア2名が販売研修に参加してウェブを使用した販売促進や製品の取り扱い、販売について学んだ。

①泥藍作り（7月15日～8月9日）

今年度は6月に入ってから雨が良く降つたため藍の葉の成長が進み、当初の予定より早い7月上旬には藍の葉の十分な成長が確認でき、7月17日から泥藍作りを開始した。今年度の泥藍作りは、これまでと異なり、メンバーが各家庭を回り、協力して泥藍作りを実施した。

各自で育てた藍の葉を刈り取り、メンバーそれぞれの家に順番に集まり泥藍を作る作業を実施した。刈り取る藍の葉の量にもよるが、1家庭の泥藍作りにかかる日数は3日～5日で、8月9日にはメンバー全員の家での泥藍作りが完了した。メンバーにとっては、基本となる泥藍作りの作業を各家庭で繰り返し行うことができ、作業を確認するうえでよい方法だった。今年度は、一人当たり平均200kg、グループ全員では計1,400kgの泥藍が出来上がった。藍の葉が十分に育っていたこと、村人が近隣の地域で購入した消石灰の質が大変良かったことから、昨年度よりも色が濃く、質の良い泥藍が作ることができた。

【モニタリング記録】

- 7月12日：当会プノンペン事務所所長（チャン・スレイ）、事業責任者（関口晴美、アシスタントマネージャー（ペン・ソパール）が村を訪れ、藍染めグループと事業の実施打ち合わせを行った。藍の葉の成長具合の報告を受け、7月15日から泥藍作りをすることになり、準備するもの、必要な資材、泥藍作りの工程などを確認した。また、織り技術研修のための織り機見本を当会織物センターから持参した。しかし、後日、村では織機を作ることはできないことが判明したため、タケオ州で作り運ぶこととした。
- 7月18日：事業責任者が、アンコールバーン村を訪れ、泥藍作りのモニタリング。最初に泥藍を作っているメンバーの泥藍の状況、製作状況を確認した。最初に泥藍作りを実施したメンバーの家を訪れたところ、メンバーが泥藍の色が灰色っぽくなっていることを気にしていた。藍の葉を浸水し発酵させる際、石などの重しを載せて、全ての葉が水に浸かるようにした方がいいのではと伝えた。（メンバーは水に浸けてから時間を見て、容器の葉の上下をひっくり返す考えのようだった。）
- 8月2日：事務所長・事業責任者が泥藍作りのモニタリング、出来上がったそれぞれの泥藍の状態を確認しながら、製作量などを確かめた。
- 8月11日：先のモニタリングで、観察できていなかった3名が製作した泥藍を見て、製作状況やできた量などを確認した。

②織物技術研修(8月22日～10月8日、うち9月12日～16日は染め研修)

織物技術研修は当会織物センターのユーン・イムが講師となり、8月22日より藍染めグループメンバー6名が参加して開催された。1名を除いて参加者は初心者だったため、織りの作業を始める前に織物理論の講義を受けた。綿糸の精練方法、灰汁の作り方は座学、その他の織りの技術に関しては、実地で指導した。研修の実施に際して、織機や糸車などの備品を3台ずつ用意し、二人一組となって研修を行った。織りを始めて約1ヶ月後（9月末）には、織り方を一通り覚えることができた。織機に掛けた縦糸が切れやすかったため、織りやすいよう「米のり」を縦糸につけることで、縦糸が切れるのを防ぐことができた。今後の課題は、縦糸の作り方、上下の糸綜紵の作り方である。また、スカーフのフリンジの付け方も1名がまだうまく作ることができず、課題である。

【モニタリング記録】

- 8月11日：事務所長、事業責任者がモニタリング。絣織りが盛んなタケオ州サイワー地区で注文して作った織機、糸車、箆棒などの備品を研修会場に搬入、組み立てを行った。

研修で使う綿糸を参加者に一人1キロずつ渡した。研修で作るクロマー用に濃い色を染めるよう依頼した。

- 8月22日：事務所長・アシスタントマネージャーがモニタリングを実施。研修の講師であるユーン・イムも含めて打合せをし、午後から織りの研修を開始した。初日であるため、研修の目的と内容説明、織りの理論、糸の精練の仕方や灰汁の作り方などを説明した。
- 8月25日：事業責任者がモニタリング、事業の進捗状況を確認。この日は参加者それぞれが糸繰り、緯糸の準備をしていた。藍染めした綿糸は絡まりやすいため、糸巻に大変な時間がかかり、全員が作業を完了することはできなかった。
- 9月12日：藍染めワークショップ初日。3台の織機とも参加者がそれぞれの模様を織っており、順調な進み具合だった。また、メンバー以外の村人で、以前、織物をしていたという年配の方々が研修場所を訪れ、藍染めメンバーが集まって織物をしているのを興味深く見ていた。時々研修用に織り機にかけたスカーフを織る場面も見られた。若い人がクロマーを織ることができるようになると嬉しい、と話していた。

③村人ボランティアへの販売研修（販売促進）

今年度は新しい試みとして、アンコールバーン村で販売促進ボランティアを募り、伝統的な藍染め活動を広め、村で製作するスカーフの販売促進につなげる計画を進めている。アンコールバーン村に住む、ケム・ソチェアト（男性、33歳）と、チア・ソクグオン（男性、33歳）が、プノンペンにある当会事務所併設ショップやイベントにおいて、販売研修に参加した。

○第一回目研修（7月11日～23日）

当会職員ペン・ソパールが研修を担当し、販売だけでなく、アンコールバーン村藍染めグループのフェイスブックページ立ち上げや、活動写真のアップロード方法等も研修した。ボランティアの2人も、村に帰った際にフェイスブックに掲載する写真を撮影したり、村の伝統的な産業である藍染めへの関心が出てきたりと、今後の研修への参加も意欲的であった。研修中に、村では泥藍作りが行われていたため、早朝から藍畑を訪れて藍の葉を写真に納めたり、泥藍作りの行程を撮影したりして、フェイスブックに掲載した。（研修内容については添付資料を参照）
フェイスブックページ：

<https://www.facebook.com/Angkor-Ban-Indigo-Community-ABIC-294507870902860/>

○第二回目研修（8月22日～9月4日）

当会職員ペン・ソパールが主に研修を担当した。ボランティア2名が村に帰った際に、アンコールバーン村での織物技術研修の活動状況、糸繰り、経糸の整経やミーティングの様子などの写真を撮影し、ウェブにアップした。また、写真やドキュメントの保存方法なども研修した。当会カンボジア事務所併設ショップ「ピダン・クメール」では、藍染め製品や他の製品について学びながらショップの仕事を行った。また、研修中には当会織物研修センターで、藍染めや織りの作業を見学し、村の藍を使って作られた藍染め製品の売れ行きについても関心を持ってみていた。

④藍染め研修（9月12日～9月21日）

沖縄から専門家を招へいし、研修を実施した。研修では、技術向上のための話はもちろん、藍という染料の仕組み、酸通しをしてなぜ退色が防げるのか等、より専門的な話が専門家よりされたことで、今後、村人が試行錯誤の中で染めを続けていくために必要な知識を得ることができた。また、退色については、専門家よりこれまで色止めに使っていた液体の酸性度が弱いのではとのご指摘をいただき、現時点で最適と思われる酢、水との配合を決めることができたことが大きな収穫であった。(研修目標と内容、専門家の考察については別紙を参照)

7. 報告時まで発生した課題と取組み

・課題1：藍染めの濃淡の出し方

専門家を招へいしての研修実施の際、藍染めで3段階の濃淡を出すことに成功した。しかし、村のメンバーより「専門家がない状態で、染料を維持して染めた時に濃淡を出せるか不安」との声があがった。実際に専門家帰国後に村人のみで染めた糸は、中間色や濃紺は綺麗に染まったが、ライトブルーを出せない人も半数以上で、継続した研修の必要性を感じた。今後は、計画を変更して、綿糸と絹糸の染めの自主研修を実施する。専門家との研修で染めた糸を見本として、各自で濃淡をつけた3種類の糸を染め、より見本に近い色を出せるよう練習を続けることとしたい。今年度中に絹糸2.5kg、綿糸2kgの染めを続け、技術のさらなる安定を目指す。

・課題2：織物技術研修のスケジュール

織物技術研修は糸繰りに多くの時間がかかり、予定のスケジュールより遅れたことにより、上下の糸綜統の作り方についての指導時間が少なくなったため、研修日程を延長して行なった。

・課題4：スタッフ体制

当会カンボジア事務所の販売促進を担当していたメット・セレイ・ラターが自己都合で退職した。今後は、ショップの運営はシニアスタッフを中心とした職員で行い、販売促進などは事業責任者である関口晴美、アシスタントマネージャーであるペン・ソパールがその職務を引き継ぐこととした。

8. 添付書類

- ・ 助成金支出報告書（別紙3 成長型助成金支出報告）
- ・ 事業の進行状況を証明する写真など

9. 事業担当者および問合せ先

特定非営利活動法人幼い難民を考える会（CYR）

住所 東京都台東区台東1-12-11 青木ビル2階A室

Tel 03-6803-2015 Fax 03-6803-2016

E-mail info@cyr.or.jp

担当 鎌田苑子 (kamada@cyr.or.jp)

以上

別紙1 (第1～第3 四半期報告用)

6. 事業進捗状況

上位目標 (申請書に記載した上位目標)	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 藍染め技術の向上により、カンボジア伝統織物の市場価値・文化価値を向上させ、泥藍販売とスカーフの販売による村人の収入が、年間 800 ドルになる。 ・ 藍染めグループの村人が、泥藍や藍染めスカーフの販売によって収入が増加することで、他の村人も藍染めの事業に関心を持ち、藍染め技術復興と保全の担い手が増え、伝統技術が将来まで残される。 	
事業目標：	達成度
<ul style="list-style-type: none"> ・ 良質な泥藍ができ、藍染め製品の製作技術が向上すること ・ 村人が織物技術を習得し、藍染めした綿糸でスカーフを製作、販売ができるようになること ・ アンコールバーン村のボランティアに販売研修を実施することで、村を訪れる観光客に作ったスカーフ (クロマー) を販売できるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 藍染め専門家にも見て頂いたところ、泥藍の質には良く、糸も良い色の染まっているとの評価を頂いた。村人の染め技術については、染めの基礎はできているが、全ての作業をより丁寧に行うことや、販売できる製品を作るための心構えなど意識の面での改革は、今後さらに必要である。 ・ 織物技術研修については、自分達の作った泥藍で染めた綿糸でスカーフを織る基礎技術を習得できた。経糸のチェック模様などに合わせた糸の計算方法、上下の糸そこうの作り方など更に研修が必要である。9月末までには、3 模様、9 枚のスカーフが織りあがった。 ・ 村のボランティア 2 名による販売研修は、フェイスブックのアカウント作成、写真の撮り方、アップロードのし方、藍染めの製作工程への理解と関心が高まった。実際に本会のショップで藍染め製品の販売状況などを見学し、手伝った。

活動計画 (申請書に記載した具体的活動)	実施状況	活動実施成果と確認方法
<アンコールバーン村での活動> 7月～8月	活動が計画通り進んでいない場合は、その理由と改善策も記載してください。	

<ul style="list-style-type: none"> ・村人が中心となって泥藍作りの準備や泥藍作りを行う。 ・日本人藍染め専門家を招へいし、染液の維持方法や染めについて技術向上研修を受ける。 <p style="text-align: center;">9月～10月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・藍染グループメンバー6名に綿スカーフの織り技術研修を行い、精錬～縦糸の準備・織り機にかける～織りまでの全ての技術を学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・泥藍作りは当初の計画通り、7月～8月にかけて実施できた。今年度はこれまでと異なり、メンバーの家で泥藍作りをすることで何度も泥藍作りの工程を確認して実施した。 ・日本人藍染め専門家を招へいしての研修は、9月12日～16日、19日～21日で実施した。 ・8月22日から40日間の予定で、織物技術研修を実施した。 ・3種類のデザインの織り方を研修し、一人10枚のスカーフを織る研修を実施している。2人1組となり1台の織り機で研修した。藍染めの糸が絡まりやすかったこともあり、9月末の時点で織りあがったスカーフは9枚であった。村人の強い希望もあり、研修を担当したユーン・イムが村での滞在を数日間延長して指導にあたった。また、研修期間中に織り終えることができなかったスカーフは、村人が引き続き織って、完成させ、当会職員がモニタリング時に確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・泥藍作りを各家で別々に行った。村人は異なる環境下での泥藍作りを複数回経験したことで、泥藍作りの基礎を復習することができた。 ・泥藍の質については、専門家を招へいした際に、泥藍に含まれる石灰分の量などを見てもらい、実際に染めてみて、きれいな色に染めることができ、染めに問題ない質のものができているとの評価を頂いた。 ・染め研修では、染めの濃淡を出す練習をした。研修中にはこれまでになかったライトブルーを出すこともできた。今後は、常に安定して見本糸と同じ色合いの濃淡を出せるかどうかが課題であり、継続した練習の必要性を感じた。 ・織物技術研修では、3種類のスカーフを製作 ⇒9月末までに完成した数枚のスカーフは10月9日の出張販売にてトライアルで出品した。
<p><当会カンボジア事務所での活動></p> <p style="text-align: center;">7月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンコールバーン村ボランティア2名がPidankhmerにて14日間の販売研修を行う。 <p style="text-align: center;">9月～10月</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2名のボランティアが第1回(7月11日～22日)、第2回(8月22日～9月2日)の販売研修を本会プランペン事務所及びピダン・クメールのショップで、実施した。藍染めグループの活動の写真を撮影し、新たに立ち上げたフェイスブックに掲載した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンコールバーン藍染めコミュニティのフェイスブックを立ち上げ、ボランティアが研修期間に村に帰った時に、藍染めグループの活動を撮影し、フェイスブックに掲載している。見てくれている人も増えた。

<ul style="list-style-type: none"> ・リーフレットの完成と印刷。 	<ul style="list-style-type: none"> ・藍染め村のリーフレット第一案ができ、クメール語にもして、藍染めグループメンバーとも一緒に協議した。10月には、完成させる計画。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リーフレットは10月には最終案にし、完成させる。現在は英語版ドラフトにネイティブチェックを入れるなど、作成中である。
--	--	---

活動地域での反響（受益者へのアンケートやコメント等含む）

【染めワークショップ参加者】

- ・以前よりも大きい60リットルの容器を使うことにしたし、一度に染める量も以前より少なくしたので、今までよりも染めやすかった。また、ヤシ砂糖と酒の量をこれまでよりも少なくしたので、安く済ませられるので良かった。
- ・ヤシ砂糖や酒の量をこれまでと大きく変えたので、今までの量を使わなくても大丈夫だろうかという心配があったが、きれいな色に染まり、とても嬉しかった。特に薄いブルーの色、濃い紺色がとてもきれいに、むらなく染まったことが嬉しかった。
- ・カンボジア産の酢がPHも高く、色止めに使えることがわかったので良かった。コンポンチャム州で買える酢であることもいい。
- ・染め液の攪拌を今までは、勢いよくぐるぐる何回もかき混ぜていた。しかし、正しい方法は0下から上に持ち上げるように静かに10回混ぜるという方法を学び、藍の染液も気をつけて丁寧に扱わなければならないと思った。
- ・1日に染める糸の量が、絹糸で6束から8束だったので、1キロのシルクを染めるには何日も時間がかかり、染めの値段が高くなってしまふ。染液と糸の染まり具合を見ながら、染めるタイミングや時間などを決めていく方法は、難しい。「～分の染めを何セット」と注文してもらおうほうが染めやすい。

【織り技術研修】

- ・上下の綜紵の作り方、ストライプの模様となる縦糸の数を計算するのが難しい。もっと時間をとって教えてほしかった。自分で継続して織りや糸繰りができるように糸車を自宅にあると嬉しいと思った。織りは、自分たちの染めた糸でクロマーが織れるようになり、とても嬉しい。村に来る観光客が買ってくれるか少し不安はあるが、買ってくれると嬉しい。